

# 2023 年度 奨学生入学試験

## 国

## 語

(試験時間 60分)

### 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、30ページあります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 試験コード欄・座席番号欄

試験コード・座席番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名・フリガナを記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答 番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。





**第1問** 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えなさい。

いったい運動部活動は、なぜ生徒と教師を苦しめるほど過剰になってしまったのか。「ブラック部活」を生み出した根本的な要因は何なのか。

その根本的な理由は、運動部活動に込められた「自主性」という理念ではないか、と私は考えている。

戦前には、子どもを、国家の命令通りに動くような戦争の道具に仕立て上げようとする、軍国主義的な教育が行われた。

その反省から、戦後は民主主義的な教育が構想された。国民は、国家の言いなりになるのではなくて、自分で考えて自分で行動する「自主性」をもたねばならない。だから、そうした「自主性」をもった国民を育てることが、戦後民主主義教育の使命になった。

これは難題だ。「自主性」を持った国民を育てることは、【a】戦前のような教育のあり方では達成できないし、カリキュラム内容や授業内容を変えるだけでも不十分だ。なぜなら、カリキュラムは大人が決めたものであり、授業はそれを子どもに一方的に伝えるものに過ぎない。

【b】、どうすればいいのか。民主主義教育を目指そうとした戦後の教育者たちは苦悩した。

そこで彼らは、部活動に光を見出した。その解釈は次のようなものだ。

自分で考え自分で行動する国民、つまり「自主性」をもった人間を育てるためには、生徒がカリキュラムや授業の枠にしぼられてはいけない。自分の思うままに **X** し、仲間同士で相談し協力し、生徒自身の「自主性」を中心にした教育場面が必要になる。それこそが部活動ではないか。部活動の中心には、生徒の「自主性」がある。部活動を教育として活用できれば、自分で考え自分で行動する「自主性」をもった国民を育てることができるはずだ――。

戦後の教育者たちは、このように解釈した。戦前から続いてきた部活動に、「自主性」という戦後的な理念が込められた。【c】

部活動は、戦後民主主義教育にとって重要な意義を持つことになった。

この「自主性」という理念は、疑問「なぜスポーツは学校教育に結び付くのか」を解きほぐすキーワードになる。

戦後の教育は、「自主性」の理念を大切にした。この「自主性」の理念からスポーツを眺めてみると、まさにスポーツというものは強制されるのではなく、「自主性」が発揮される場面のように見える。生徒が「自主性」を発揮して、自ら技術を伸ばしたり、努力を重ねたり、仲間と協力したりしていくものに見える。これはまさに、価値ある「自主性」が発揮された、素晴らしい教育活動だ、と学校や教師は解釈した。

つまり、スポーツそのものに、「自主性」という戦後民主主義教育的な理念が見出された。だからスポーツが学校教育に結び付けられた。その結節点に運動部活動が存在したのである。

だから運動部活動は、戦後日本社会という特異な文脈が生み出した一つの現象だと言える。そう考えると、運動部活動が他の国では見られない日本特殊な存在である理由が理解できる。

また、負担を被る教師が、それでも運動部活動へかかわり続ける理由も理解できる。教師の主観からは、運動部活動がまさに「理想の教育」を体現する活動に見えるからであり、それをホウキする<sup>イ</sup>ことなどできるわけがないのだから。

それゆえ運動部活動は拡大した。そして持続可能性が危ぶまれるほど肥大化しても維持された。その延長線上に「ブラック部活」の時代が幕を開けたのだ。

しかし、「自主性」を大切にしているはずが、なぜ「ブラック」になるのか。この逆説を解きほぐすために注目すべきなのが、パターンリズム問題へのねじれた「解答」だ。

パターンリズムとは、子どものために子どもに自由に介入する権力だ。当然、「自主性」を重ねる学校と教師は、無理矢理に生徒を教育・訓練・強制したりすることは避けたいと願ってきた。

他方で、生徒を好き勝手に自由放任にしているのは、学校教育は成り立たない。自由を大切にしたいと願いながらもパターンリズムを捨て去ることができない。どうすればいいのか。戦後日本社会という文脈での学校教育は葛藤した。

そこで見いだされた「解答」が、ユウギとしてのスポーツだった<sup>(B)</sup>のであり、運動部活動だった。本人の自由を守りながらその中で教育しよう、あるいは本人の自由を通して教育しよう。そうした教育を実現する可能性が、その正否と成否は別にして、スポーツそして運動部活動に賭けられた。

戦後日本社会という文脈における学校教育が、パターンリズム問題に対して用意した「解答」。それがつまり、運動部活動だったのだ。

ただし、この「解答」はねじれている。生徒不在の、学校と教師による意味解釈に過ぎないからだ。たとえ学校と教師が「運動部活動で生徒は自主的に楽しんでいはずだ」と思っているとしても、実際には生徒が、過剰な運動部活動に抑圧されているかもしれない。

だが、学校と教師は気づかない。なぜなら運動部活動は「自主性」の理念を体現する場であると解釈される限り、そこに抑圧は存在しないことになってしまふからだ。

それどころか運動部活動を増やし伸ばしていくことにハクシヤがかかる<sup>(A)</sup>。運動部活動の種類や数、参加する生徒の人数が増えるほど、そして活動する日数や時間が伸びるほど、より多くの「自主性」が実現された、と解釈されてしまふからだ。

すると、運動部活動が過剰になる。いつしか生徒がホンネでは「部活嫌だな」と思っても、部活を続けることによってでしか、学校と教師が解釈する「自主性」を示せないからだ。

だから生徒が「部活をやめたい」と言っても、顧問教師は「お前はやる気が無いのか？」と相手にしてくれない。それどころか、「もっと自主的に頑張ってみよう」と顧問教師に命令されて、「はい、自主的になります！」と生徒が服従する。

コントだ。

いや、教師を悪者にし過ぎてしまった。教師もまた際限なく「自主性」の実現に追い立てられて、運動部活動から逃れられな

Y

いのだから。二重三重にねじれてしまっている。

運動部活動は、戦後的な「自主性」の理念を抱きしめ続けてきた。「自主性」のまばゆい光が、それが生み出す矛盾と問題を覆い隠しながら、ひっそりとじわじわと着実に、運動部活動は生徒と教師を苦しめるほど「ブラック」になったのだ。二〇一三年に私たちのまなざしが変わり、それに気づくまで。

以上のような分析を私は博士論文で行ったわけだが、それをまとめた学術書として『運動部活動の戦後と現在』を上梓した。いくつかの学術的評価をいただいたが、一般の読者や現場関係者からは、「だから何？」で、部活の問題を解決するためにどうするの？」と当然の反応をいただいた。

もちろん問題解決には、体罰・暴力事件や重大事故を未然に防ぐ指導者研修や環境整備を徹底すること、それでも体罰・暴力を振るった顧問教師や指導者は即刻追放すること、「やり過ぎ」を是正しスポーツ庁のガイドラインなどに沿って適切に規制すること、具体的には週二日以上以上の休養日を設定したり、二時間程度の活動に留めることが最低限必要だ。

加えて、根本的な問題解決を図るためには、それらとは違った方向からも検討せねばならない。その方向は、「自主性」の理念がスポーツと学校教育を結び付ける、という私の結論を踏まえると、<sup>おの</sup>自ずと見えてくる。

「自主性」の理念を脱構築すればいい、ということだ。

「自主性」という理念は魅力的だ。しかし、その反面で、危険な魔力も持ち合わせた、恐ろしいマジックワードでもある。

「自主性」それ自体は善なので、真正面から反対しづらい。生徒や教師の「自主性」を存分に保障した結果、部活動は過剰に肥大化した。それでも、「自主性」の発揮はやはり善なので、反対してはいけない気がしてしまう。

他方で、「自主性」という理念は、実際には強制し抑圧している実態をインペイする。<sup>レ</sup>「自主性」を大切にすることははずの部活動の現実、必ずしも「自主性」に満ちているわけではない。生徒と教師のホンネとはかけ離れた実態がある。

だから、部活動に注がれる「自主性」という理念は危険だ。「やつぱり自主性がいいね」と言い続けていたら、反対できずにずるずると部活動は肥大化し、いつしか生徒も教師も強制的に巻き込まれてしまった。

この事態を「自主性」の罨むすと呼ぶことにしよう。部活動の問題を根本的に解決するためには、「自主性」の罨にはまらないようにすることだ。

部活動にある「自主性」の罨にはまらないようにする方法の一つは、部活動の外側に目を向けて相対化することだ。

さて、部活動の外側には社会がある。その社会のあり方は、法律や道徳を踏まえて決まっている。だから、部活動のあり方も法律や道徳を踏まえねばならない。当たり前の話だ。

しかし、「自主性」のすばらしさを叫ぶ人ほど、<sup>E)</sup>それを忘れる。生徒への体罰は許されないし、倒れてしまいうまで教師に時間外勤務を課すことも許されない。なぜなら、法律でそう決まっているからであり、道徳的に許されないからだ。

部活動の外側にある授業とも比べてみよう。授業は、生きていく上で必要な知識や技術を、生徒に身につけさせるためである。生徒に必要なことなのだから、生徒の好き嫌いは二の次で、生徒は授業を受ける必要がある。

だから、授業は必要性の原理でつくられるべきだし、生徒に必要なものは授業で満たされなければならない。

ここで言う「必要」とは、貧困研究や障害学、社会福祉学が鍛えてきた学術用語としての「必要 (needs: ニーズ)」と重なる。

人は、貧困に陥っても、障害があっても、最低限度の生活が保障されなくてはならない。社会を生きるために必要なことは、いわゆる自己責任に帰せず、社会的に満たされなくてはならない。では、どこまでを満たすべきか。社会的に合意されたそのハインイが、「必要」だ。

こうした観点から見直すと、部活動は生きていく上で絶対に必要なわけではない。たとえスポーツや文化活動をしなくても、趣味の楽しみが減ることは残念だが、人生が終わるわけではない。仮に人生に不可欠ならば、必要のために部活動は強制されることにもなるだろう。



ところが生徒は、必要だから仕方なく部活動をするのではなく、したいから部活動をしているに過ぎない。だから部活動を貫くのは、「必要」でなく「欲望」だ。

こう言うと、「部活はなくてはならない、絶対必要な教育活動だ」「授業では学べない必要なことが、部活で教えられるんだ」と反論が来るだろう。

しかし、本当に絶対に必要なことなら、それはカリキュラムに組み入れて、授業ですべての生徒に与えるべきだ。部活動で教えられている「必要なこと」を、授業で誰もが学べるように改善すべきだ。

部活動の改革は、授業の改革と **Z** である。「授業はさておき部活をがんばればいいんじゃないの？」と、部活動に甘えてはいけない。私たちは、部活動への高すぎる期待値をぐんと下げて、一度、「たかが部活」と突き放してみるべきなのだ。

「自主性」の罍にはまらないようにするために、もっとシンプルな方法がある。「自主性」という言葉そのものを使わないようにすることだ。

「やっぱり自主性がいいね」と言わなければ、反対することも認められ、無理矢理に強制的に巻き込まれることも防げる。

類義語も同様だ。「自主的な部活をめざそう」「生徒の主体性が大事だ」「生徒の自治に任せよう」と、部活動関係者（現場教師はもとより、ナイーブな研究者も！）が何度も繰り返し大合唱してきた。あげく、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動」と学習指導要領にも書き込まれた。

私には、どれもこれも欺瞞まに満ちた言葉に聞こえてしまう。それらの言葉が、私たちをいつのまにか「自主性」の罍に陥れてきたからだ。

だからいったん——「自主性」の罍が完全に解体されるまで——「自主性」という言葉とその類義語の使用を控えるべきではないか。

ラディカル過ぎる提案だろうか？ 実は私も少しそう思う。それでも、手垢あかの付いた「自主性」の理念に振り回されな

部活動のあり方を再構築するために問題提起しておきたい。

おそらく、<sup>(F)</sup>こうしたラディカルな問題提起に多くの人が躊躇ちゆうちよしてしまうわけは、「自主性」の理念を手放すことで、そこに含まれていた「したいことができる」という部活動の良さを丸ごと捨て去るように思われるからだろう。たしかに、産湯と共に赤子を流してはいけない。「したいことができる」ことは、ひねくれた私も含めて、誰もがすばらしいと感じる部活動の良さだ。だから私は、「たかが部活」と言いながら、「されど部活」とも言いたい。

(中澤篤史の文章による。ただし、一部変更した。)

(注) 1 カリキュラム … 教育内容を段階に応じて配置した教育課程。

2 「ブラック部活」の時代 … 二〇一三年以降に、生徒への過度な練習の強制や教員の長時間労働といった、いわゆる「ブラック部活」に関する諸問題が相次いで発覚し、社会問題となったことを指す。

3 学習指導要領 … 文部科学省が定めた、初等教育および中等教育における教育課程の基準。

4 ラディカル … 過激で急進的なさま。

問1 空欄〔 a 〕〔 c 〕に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

1

3

a

1

① ところが

② いわば

③ それゆえ

④ もちろん

⑤ はからずも

b

2

① たとえば

② なるほど

③ では

④ さらに

⑤ また

c

3

① こうして

② なぜならば

③ その一方で

④ あるいは

⑤ やはり

問2 破線部ア「光を見出した」・イ「際限なく」・ウ「是正」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 4 ～ 6。

ア 「光を見出した」

- 4
- ① 望みを抱いた
  - ② 可能性を探った
  - ③ 一度すべてを捨てた
  - ④ 有効性を認めた
  - ⑤ 体面を保った

イ 「際限なく」

- 5
- ① 予算をかけずに
  - ② 初めから全力で
  - ③ 最後まであきらめずに
  - ④ 気を緩めることなく
  - ⑤ ずっと終わることなく

ウ 「是正」

- 6
- ① 誤った点を改善すること
  - ② 正しいかどうか判断すること
  - ③ 不都合なことを見過ごすこと
  - ④ 良いものをより良くすること
  - ⑤ 悪い点を検討すること

問3

空欄

X

Y

Z

解答番号は

7

8

9

X

7

Y

8

Z

9

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 暗中模索
- ② 一挙兩得
- ③ 自画自賛
- ④ 試行錯誤
- ⑤ 当意即妙
- ⑥ 二者択一
- ⑦ 表裏一体
- ⑧ 本末転倒

問 4

波線部(A)「運動部活動は、戦後日本社会という特異な文脈が生み出した一つの現象だと言える」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 10。

- ① 戦後の日本社会では、スポーツを通して「自主性」を身につける教育こそが理想だと考えられるようになったため、新しく運動部を創設する学校が増えたということ。
- ② 戦後教育が新たに目指した「自主性」を獲得する方法を探し求める中で、スポーツのもつ教育効果が注目され、学校教育に運動部活動が広く取り入れられるようになったということ。
- ③ 民主主義の成熟した戦後の日本において、運動部活動のような国民の「自主性」を育む行動が自然とわきおこったのは、歴史的な必然であったということ。
- ④ 国家に従わせるための戦前教育から、「自主性」を身につけることを重視する戦後教育へと移り変わっていく流れの中で、運動部活動の特殊性が明らかになり始めたということ。
- ⑤ 平和な現代では、スポーツのような強制されない活動でしか「自主性」を身につけることができないため、学校教育で運動部活動を積極的に推奨するようになったということ。

問5 波線部(B)『自主性』を大切にしているはずが、なぜ『ブラック』になるのか」とあるが、その理由として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

11。

- ① 教師が、戦後教育における「自主性」の理念に束縛されている上に、運動部活動の負担と生徒による「自主性」の実現とが比例しているという見方をしてしまったから。
- ② 運動部活動こそが「理想の教育」を体現したものであって、生徒の「自主性」を育成するためにその持続と拡大に尽力しなければならぬことが、生徒に理解されていなかったから。
- ③ 教育におけるパターンリズム問題の「解答」として用意されたのが運動部活動だったために、その持続こそが教育であるのと目的と手段が入れ替わってとらえられるようになったから。
- ④ 教師は、生徒の「自主性」を涵養<sup>かん</sup>するためには運動部活動が重要であることは理解しているが、学校教育を成り立たせるためにはパターンリズムによる強制も必要だと考えているから。
- ⑤ 「自主性」という言葉はそもそも多義的な使われ方をするものであって、生徒の考える「自主性」と教師目線での「自主性」とが一致していないことに、誰も気がつかなかったから。

問 6 波線部(C)「正否と成否」とあるが、この表現についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① 縁語
- ② 掛詞ことば
- ③ 同語反復
- ④ 対義語
- ⑤ 同音異義語



問7 波線部D) 『自主性』の理念を脱構築すればいい」とあるが、筆者は具体的にはどうすればよいと主張しているか。その

意見として適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

13

14

- ① 「自主性」という理念を前面に押し出して、部活動に反対するような意見を封じ込めてしまう。
- ② 相手にどことなく良い印象を与える「自主性」という言葉そのものの使用を控えるようにする。
- ③ 「ブラック部活」が存在することを認めた上で、体罰や暴力を未然に防ぐ努力を惜しまないようにする。
- ④ 運動部活動が必ずしも必要なものではないと認め、「自主性」の体現を求めないようにする。
- ⑤ 「部活をやめたい」という生徒に対して、より強く「自主性」を発揮することを働きかける。

問 8 波線部(E)「それを忘れる」とあるが、この「それ」が指す内容は何か。その説明として最も適切なものを、次の①～

⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 「自主性」の罫にはまらないようにする方法
- ② 「自主性」の理念のすばらしさ
- ③ 社会の決まりや慣習を守ること
- ④ 授業が部活動の外側にあること
- ⑤ 社会のあり方を相対化すること

問9 波線部F「こうしたらディカルな問題提起」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の

① ～ ⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

16。

- ① 「したいことができる」という運動部活動がもつ良さを守っていくために、うそで塗り固められた「自主性」の理念を一度完全に忘れ去った上で、あらためて部活動のあり方を検討すること。
- ② 戦後民主主義の文脈において、教師と生徒たちが共同して築き上げてきた運動部活動の「自主性」がもつすばらしい理念を受け継ぐために、「自主性」という言葉を用いずに運動部活動を継続していくこと。
- ③ 生徒や学校関係者が「自主性」の罨に陥らないようにするため、運動部活動が本来に必要なもののかをあらためて検討して、「自主性」という言葉が与える誤解を少しでも軽減しようとする事。
- ④ 戦後の民主主義的な学校教育によって不可分に結びついた運動部活動と「自主性」の理念との関係を本来のあるべき姿に戻すために、耳当たりの良い「自主性」という言葉やそれに類似した表現を封印すること。
- ⑤ 「ブラック部活」にまつわる教育問題を解決するために、運動部活動の中でしか育まれない「自主性」を獲得することをあきらめ、学校教育のカリキュラムの中に他に必要とされる要素を作り出すこと。

問10 次の各文について、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答

番号は

17

く

20

。

17

戦後の学校教育において「ブラック部活」が生まれた理由は、「自主性」をもった人間を育てるという目的が途中から誤って解釈されるようになったからである。

18

パターンリズムとは、生徒と教師の両方の権利を守るために考案されたもので、子どもの自由を制限することで学校教育を成り立たせようとすることである。

19

学校教育ではスポーツを通して「自主性」を身につけることが期待されていたために、運動部活動がはらむ問題点や矛盾は見逃され、長期にわたって表面化することがなかった。

20

筆者は、生徒の「自主性」のためには運動部活動が必ずしも「必要」な存在ではないとしつつも、「したいことができる」という部活動がもつ良さには理解を示している。

問11

本文では第二次世界大戦終戦後からの日本の教育の変化が取り上げられているが、日本の文学においても、終戦を機に大きな変化が訪れた。一九五〇年代前半に文壇に登場した「第三の新人」と呼ばれるグループの一人で、キリスト教(カトリック)を大きなテーマとして取り扱い、『海と毒薬』『沈黙』などの作品で知られる小説家は誰か。最も適切なものを、次の①～⑥の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

21。

- ① 芥川龍之介      ② 有島武郎      ③ 志賀直哉      ④ 遠藤周作      ⑤ 吉行淳之介      ⑥ 大江健三郎

問12 二重傍線部(イ)～(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解

答番号は

22

26

(イ) ホウキ

22

- ① キンキ地方へ行く
- ② 空気がキハクになる
- ③ 試合をキケンする
- ④ キレツが走る
- ⑤ キカ学の問題を解く

(ロ) ユウギ

23

- ① ギキョクを読む
- ② イギを申し出る
- ③ キヨギを述べる
- ④ ギシキを終える
- ⑤ ギセイを強いる

(ハ) ハクシヤ

24

- ① テイハク中の船を見学する
- ② ハクライ品を求める
- ③ ハクセイを展示する
- ④ ハクガイから逃れる
- ⑤ 参加者が一斉にハクシユする

(ニ) インペイ

25

- ① 組織のキュウヘイを改める
- ② コウオツヘイテイで評価する
- ③ オウヘイな主人を見限る
- ④ カーテンで室内をシャヘイする
- ⑤ ヘイカのそばにかしづく

(ホ) ハンイ

26

- ① モハンを示す
- ② 無料でハンプする
- ③ ハンザツな手続きを改める
- ④ キュウゴハンを待つ
- ⑤ ハンボウ期を迎える

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

米国の自動車王、ヘンリー・フォードによると、「老人とは学ぶことをやめた者」らしい。この定義に従えば、奈良県立大和中央高校(夜間)2年の[ ]さんは73歳の今も[ ]だ。

大阪府豊中市に生まれた。父が事業に失敗し小学2年で奈良県に移る。「口では言えんほどの貧乏」で、学校から教材費を持って来いと言われるのがつらかった。6年生で母が他界。住み込みで働くしかなく、中学に通えなかった。

「同じ年ごろの子が学生服を着て通学するのがうらやましゅうてね」。紳士服の仕立てや製靴の職人として、がむしゃらに働いた。ただ、他者との付き合いは苦手なままだった。「小学校卒」のコンプレックスが消えなかったからである。

子育てが一段落し、経済的にも余裕ができた。2016年夏、思い切って奈良市立春日中学夜間学級に入った。67歳の[ ]さんはクラスで一番若かった。翌春から3年間、生徒会長を務め、20年に高校に入学。友人はどんどん増えた。

授業は午後5時半から9時まで。飲みにも行けない。今週は後期の期末試験が続き、結果の発表は週明けだ。「社会科は何とかなったんちやいますか。問題は数学。素数とか何とか、ややこしいです」と[ ]さんは笑う。2年後は大学受験である。「人権について学びたいんですわ」。

仏詩人のアナトール・フランスは言っている。「もし私が神なら、青春を人生の終わりにおいただろう」。小学生と中学生の孫娘が1人ずつ。おじいちゃんは今は青春である。

『毎日新聞』二〇二二年二月二日「余録」による

※著作権法上の都合により一部伏字しております。



問 1 空欄

X

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

27

。

- ① 学生
- ② 盤石
- ③ 青年
- ④ 健在
- ⑤ 頑健

問2 破線部ア「他界」と近い意味の語句として適切ではないものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答

番号は 28。

- ① 逝去
- ② 遭難
- ③ 昇天
- ④ 物故
- ⑤ 永眠

問3 波線部(A)「思い切って奈良市立春日中学夜間学級に入った」とあるが、これはなぜか。その理由として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

29。

- ① 自分は実際の年齢よりも若いと感じ、体力と根気を必要とする夜間学級にも耐えることができると思ったから。
- ② 両親を襲った不幸のために勉学の機会を奪われてしまったという、自分の身に降りかかった不運を恨んでいたから。
- ③ 生活に余裕もでき、対人関係での苦手意識の原因だった学歴コンプレックスを解消する好機だと考えたから。
- ④ 年齢は違えど同級生と触れ合うことで、失われた青春を少しは取り戻すことができるかもしれないと思ったから。
- ⑤ 夜間学級であれば空いた時間に通学が可能で、卒業後に一緒に飲みに行ける同年代の友人もできると思ったから。

問 4

日本語では、特定の条件で生じる音の変化を「音便」と呼び、複数の種類がある。破線部「イ」に「言っている」に見られる音便はこのうちどれに当たるか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

30

- ① ア音便
- ② イ音便
- ③ ウ音便
- ④ 撥音便
- ⑤ 促音便

問5 波線部(B)「おじいちゃんは今は青春である」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

31。

- ① 子育てを無事に終え、学業を見守ってくれるふたりの若い孫娘にも恵まれて、「**■**さん」の家庭生活は今では幸福と活気に満ちあふれている。
- ② アナトール・フランスが述べるように、人生が終わりに近づいた時に初めて「青春」と出会えるのが人間であり、「**■**さん」はその好例である。
- ③ 夜間学級への入学により、同じような身の上の友人と数多く知り合うことができた今こそが、「**■**さん」にとって青春に相当する時期に当たる。
- ④ 他の級友より若い「**■**さん」であったが、中学夜間学級時代は生徒会長を務めてクラスの中心としての役割を果たし、充実した高校生活を送っている。
- ⑤ 孫が思春期を迎えるような年齢になっても、高校生としていきいきと学び続ける「**■**さん」は、今こそ青春と呼ぶべき時期のただ中にある。

問 6 二重傍線部(イ)～(ホ)の品詞名を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は  ～ 。

(イ) ヘンリー・フォードによると

(ロ) ただ、他者との付き合いは

(ハ) 消えなかったからである

(ニ) どんどん増えた

(ホ) 学びたいんですわ

- |   |     |
|---|-----|
| ① | 名詞  |
| ② | 動詞  |
| ③ | 形容詞 |
| ④ | 連体詞 |
| ⑤ | 副詞  |
| ⑥ | 接続詞 |
| ⑦ | 助詞  |
| ⑧ | 助動詞 |